

[C22] 学際複合的研究を誘発する記録映像アーカイヴィング手法について：

1930 年代フィリピンと 1970 年代北部タイの映像を題材として

○藤岡洋¹⁾

¹⁾ 京都大学, 〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町

E-mail: hujioka@gmail.com

On archiving methods of moving images records to trigger inter- and multi- disciplinary research:

The Philippines in the 1930s and Northern Thailand in the 1970s

HUZIOKA Hiroshi¹⁾

¹⁾ Kyoto University, Yoshida-honmachi, Sakyo-ku, Kyoto, 606-8501 Japan

【発表概要】

アナログフィルムで記録された動的映像（以下、映像）は時に内容の冗長性から、資料化がメディア単位にとどまり内容まで踏み込むことが難しい。そこで物理的にフィルムに残された映像の最小単位：ショットを部分映像へのアクセス経路として確保し、複数のショットを意味的単位：シーンとして指定することで、冗長な記録映像を資料化する試み（ショット単位分析、仮称）を行ってきた。シーンを指定する過程では、映像が写真など他種資料を引き寄せ、分析・検証する他分野研究者の間での闊達な議論を促される。また最近になって、この分析が参加した研究者自身の研究に還元されていく小さな例も見られるようになってきた。本発表は映像資料化の方法論を簡単に説明した上で、シーン指定の途上での資料と研究者との間に起きた事例をいくつか紹介し、アーカイブ構築過程（アーカイヴィング）そのものの意義について考える。

1. はじめに

取り上げる2つの動的映像（以下、映像）は、撮影場所も撮影時代も異なるアナログフィルム映像である。

一つは松本信弘、梅棹忠夫に次いで当時はまだ学術的に未開の地であった北部タイに分け入った人類学者・白鳥芳郎率いる学術調査団の調査行程記録した8mmフィルム映像である。この記録はフィルム本数で129本。記録時間はおよそ7時間強。カラー映像である（以下、白鳥資料）。

もう一つは愛媛出身の商人で、戦前フィリピンに渡り大百貨店を展開した大阪バザールの当時の社長・松井清衛が主に記録した16mmフィルム映像である。この映像はいわゆるホームムービーとは一線を画していて、松井清衛が企業人として制作しようとしていたプロモーション映像と思われるものやフィリピン各所にあった支店、工場の記録も収められている。フィルム本数は51本。記録時間はおよそ4時間弱。モノクロ映像である（以下、松井家資料）。

白鳥資料は、白鳥がドイツの人類学会で紹介し反響があったという噂があるが、現在までその詳細は不明である。また日本・タイ修好130周年を記念して白鳥の個人所蔵品を基に設立された横浜ユーラシア文化館で開かれた特別展[1]では一部の映像が流されている。ただ、それ以外に目立った映写記録もなく、その後研究者による言及もされてこなかった。とはいうものの、この記録以外の、とりわけ写真や実体資料は収蔵されている南山大学人類学博物館では、農具など実体資料が常設展示され、写真資料の調査も断続的ではあるものの行われてきた。

松井家資料は戦前フィリピンの日本人実業家によって記録されたものとしては最古の映像記録とされ、発見者でもある直系子孫の尽力もあり、発見時から当該地域研究者の間では注目されてきた。大学での映写会[1]を皮切りに、ドキュメンタリーテレビ番組[2][3]でも挿入という形で活用されている。

二つのアナログフィルムはデジタル化を経たものの、数多の調査記録ないし個人記録映

像がそうであるほうに、映写以外にはこれまで活用方法が見いだされてこなかった。映写以外の方法で映像を学術資料として利用するにはどうすればよいのか。そもそも学術資料としての映像の価値はどこにあるのか。これが問題の所在である。

2. 方法の概要

現在、映像は共有インフラが普及し、制作も急速に高度化・簡便化がすすんでいる。例えば映像人類学はこの恩恵を大いに受けているし、川瀬[4]や丹羽[5]は身体パフォーマンスを通じて映像を資料として活用する新たな試みも行なっている。ここで取り上げる方法はこれらと並行して、ただし別の観点から映像、なかでも未編集映像の資料価値の採掘を目指してきた。

未編集映像は内容が冗長なため、視聴はおろか学術資料として長年活用の途が見出されてこなかった。一方、未編集映像には文字通り編集を経ないことで、映画や映像ドキュメンタリーにはない、時系列がメディア内に保持されているという特長がある。この特長に利用し、冗長性に部分映像へのアクセスポイントを設定することで、検索利用ができないかとまず考えた。

このとき、アクセスポイントとして採用したのは李[6]の研究からショットとした。ショットは撮影の開始・終了位置としてフィルムに残る物理的痕跡である。とはいえ、映像のショット数は1000以上と非常に多寡になるため、次にショットをいくつかのまとまり（シーン）を指定することにした。この指定作業は、検証を必要とする解釈作業となる。白鳥資料ではフィールドノートや撮影当事者へのインタビューを通じてこの検証を行おうとしたが、時に情報が十分であったため、文献や博物館の収蔵写真をインフォーマントとともに調査することとなった。結果、映像検証が翻って、博物館の未整理写真の再整理を促すことになり、映像の資料化が一時的であれ未整理写真の再整理に切り替わる事態が生じた。また、撮影者へのインタビューでは、映像が当時の様々な記憶を想起させ、それが私蔵の

新たな資料の発掘にも寄与することにもなった。

この、映像をショットに分けシーンを指定することで映像を資料化しようとする試み（以下、ショット単位分析）は当初から、映像「を」資料化する目論見があった。映像を索引やカタログのように検索するイメージである。しかし、分析を進めるうち、この資料化方法は、映像「が」トリガーとなって資料検証の場を形成する効果も認められ始めた。

もしショット単位分析が、映像に資料検証の場の生成させるポテンシャルがあるとすれば、それは編集映像にも適用可能と考えられる。そこで2021年から一部編集映像を含む松井家資料にもショット単位分析を試みている。分析参加者は自由に途中で映像を止め、情報があれば、写真や文献、リンクなど検証の証拠となる素材をリアルタイムに示しながら場所や時代の特定を行う。その場で提案の検証が行われて、時に別の参加者から新たな資料が示されることもある。この試み当初想定していた通り、研究者それぞれの専門的関心を刺激する「契機」となった。この点については次節で報告する。

翻れば映像を中心に人が集い、そこでの交流から話題が展開する事象は、これまでの映写会でも見られてきたことで、特段珍しいことではない。ただ、その場での発言に証拠を持ち寄って裏付けをする点がショット単位分析の特長で、裏付け・検証作業は、数分のフィルムに時に数時間・複数回にわたって必要になる場合もある。

3. 事例

以下、ショット単位分析が発端となった小さな研究成果ならび、映像分析に収まらなかった議論や展開の小さな事例を紹介する。

3.1 成果：歴史研究の端緒として

まずは松井家資料からの小さな研究成果例である。ショット単位分析では、シーン確定をしようとした時点で、ショット同士の「つながり」の不自然さに気づきやすくなる効果がある。

フィリピン史研究者を中心に、映画研究者、

音楽人類学研究者が参加したセッションで、あるフィルムに a.女性が杵をつかって何かを砕いているショットから、b.いくつかの商店内のショットが続き、c.突然豚が餌を食べるショットへと続く場面があった。

商店内を記録したいくつかのショット、豚が餌を食べるいくつかのショットはすぐさま意味の塊=シーンは確定できたが、この一連のシーンの連続性は不明のまま分析は保留された。その後、この場面に関心を抱いていたメンバーの一人が、独自に文献調査を進め、その後砕いていたのがバナナの皮で、当時のフィリピンではバナナの皮を家畜の餌として利用していたことを突き止めた。これにより杵つきのシーンと養豚の食事シーンに連続性が判明するとともに、後日このメンバーの論考にも当該ショットが活用された。

3.2 成果：写真から映像分析への還元

これは白鳥資料からの例である。白鳥資料には南山大学人類学博物館に 1 万枚以上の関連写真が収められている。この写真には映像と紐づくものもあるが、そうではない写真も多い。

映像とは直接記録されていないながらも、収蔵写真の一枚に地面に置かれた円形のリングがあった。当初これは農具ではないかという情報が当地を知る開発援助の研究者から寄せられた。しかし、しばらくして撮影者の自宅から発見された新たな資料の中に問題の道具が写った写真が発見された。それは祈祷師が祈祷をしている様子を記録したものだった。改めて映像を確認すると、村民の家屋の祭壇らしき場所に同じ祈祷具はかけられていた。

この例は、映像分析を契機として再整理されようした一枚の写真から別の写真が採掘され、映像分析へと再還元された例である。

3.3 学際研究の萌芽：地誌情報と地勢事情

これも白鳥記録からの例である。

本分析では地誌情報を OpenStreetMap などにマッピングさせているが、タイ北部の民族は住居の移動も厭わない。調査団が調査行程を決定するのに地図の入手は必須のはずだが、その入手経路に関する記述がこの調査団

記録には存在しなかった。調べたところ、当時、地図は日本ではもちろん、タイ軍と実質的に委託統治を受けていた旧・中国国民党残党軍の将軍から直接白鳥は調査直前に地図を入手していたとのことだった。地図と当該地との関係は、この調査団では現地ガイドとの密な人間関係の方がより重視されていたかもしれない。実際、当地で外国調査団のガイドをしていた著名な村長は例えばイギリスの調査団資料にも頻繁に登場し、白鳥調査団は海外でも高く評価されていたことが徐々に解明されつつある。

この事例は映像分析を通じて当時の特殊な政治・地勢学的な事情について再確認することとなった。

3.4 学際研究の萌芽：建築史からの関心

この分析法では時に想定していなかった方面からの関心をも引き寄せることがある。

本年 7 月マニラで行われた東南アジア研究の国際学会 SEASIA[7]では、松井家資料のショット単位分析から生まれた成果をラウンドテーブル形式で参加者とともに検討した。議論は当時の日系人の経済活動に集中したが、松井家資料は白鳥資料と異なり現在も残る建造物が多く、セッション後現在も急激に変化しているマニラの都市景観の側面からこの分析法を使った共同研究を SEASIA ホストのフィリピン国立大学建築学科から提案された。

3.5 学際研究の萌芽：企業社史室間の連携

最後に、この分析法が企業の社史室を結びつける可能性を紹介する。

分野をまたぐもののわずかな数名ではじめられた松井家資料には、製品 CM のパイロット版と思われる部分映像が含まれている。そこで本年 3 月この CM で紹介されている商品で現在も経営が続いている企業の社史室を招いたディスカッションを行った。これは大阪バザール記録を、当時の一企業として考察する目的で行われたものだったが、セッションでは当時の企業文化（ライバル企業との企業連合で海外企業と競う気風）や、当時の世界経営戦略のなかでのフィリピンの位置づけなど、雑多ながらも興味深い報告がなされ、複数の

社史室を結び共同研究ができないかなど、新たな構想ももちあがった。

これは映像分析の成果をすでに超えた動きではあるが、映像分析が研究のトリガー（契機）となり、広義の学際研究を誘発した例として挙げることも可能と考える。

4. おわりに

雑多ではあるものの、ショット単位分析に端を発するいくつかの現象について述べてきた。

歴史社会学者・佐藤健二[8]によると、データベースには「容量の大きい蓄積の価値づけ」の意義がある一方、「問いの生産」の意義もあり、「経験を引用する索引の構築過程こそが、分類わけであると同時に関係づけの実践」であるという。ここでのデータベースはデジタルアーカイブと換言してもよいだろう。

ショット単位分析はそもそも成果公開を最終的なゴールとせず、映像分析のための時限的ないし限定的なものとなっても共同編纂プラットフォームの構築を通じて参加する研究者自身の研究領域に成果を還元することを目標してきた。デジタルアーカイブ構築過程、アーカイヴィングには時に知的問いかけを産みことがある。参加した研究者が各々の関心事に沿ってこの新たなに生まれた問いかけに挑み答えることが、容易な複写性と情報を自由に可変できるデジタルアーカイブの少なく

とも一つの意義かもしれないという仮説を著者はもつ。この仮説の検証はこのショット単位映像分析を通じて、いましばらく実践していくつもりである。

参考文献

- [1] 記録映画アーカイブ・プロジェクト第 11 回ミニワークショップ. フィリピン近現代史のなかの日本人—戦前の在留邦人の記録—. 東京大学情報学環. 2018.
- [2] マンゴーの樹の下で. NHK. 2019
- [3] 彷徨える同胞. テレビ朝日. 2023.
- [4] 川瀬慈. <特集>人類学と映像実践の新たな時代に向けて. 文化人類学. 2015. 80 巻 1 号. p.1-5.
- [5] 丹羽朋子. 経験の多重化装置としてのアーカイブ活用：EC フィルムの音楽映像を用いた上映・ワークショップの試みから. デジタルアーカイブ学会誌. 2022. 6 巻 2 号. p.86-91 https://doi.org/10.24506/jsda.6.2_86.
- [6] 李東真. 動的映像資料の組織化に関わる専門的・技術的問題の検討と作業手順の開発—在日朝鮮人関係資料室の収集資料を対象に—, 学位論文(32641 甲第 728 号). 中央大学. 2016.
- [7] SEASIA2024. De/Centering Southeast Asia: <https://seasia2024.upd.edu.ph/> (参照 2024-09-17)
- [8] 佐藤健二. 読書空間の近代. 弘文堂. 1987. p.18-20.



この記事の著作権は著者に属します。この記事は Creative Commons 4.0 に基づきライセンスされます(<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>)。出典を表示することを主な条件とし、複製、改変はもちろん、営利目的での二次利用も許可されています。